

G の政治考



G の政治考は
公式サイトで更新中です。
<http://gaun-yoshinao.com/>



2017.6.13

官房長官会見と、質問をぶつける自由

総理大臣の女房役で内閣のスポークスマンとして1日2回記者会見を行っている官房長官。このポストに歴代最長の4年半在任する菅官房長官は、首相官邸への権力集中を目指した「中央省庁改革」の成果を背景に、かつてない絶大な権力を有しています。その菅官房長官の会見で、先週、真正面から何度も質問をぶつける女性記者の声を耳にして、思わず背筋を伸ばしました。



写真引用：kantei.go.jp

首相官邸の会見室は、政治記者として30代半ばに差し掛かっていた僕の、主戦場でした。1998年の夏、参議院選挙で大敗した橋本内閣に代わって、小渕内閣が発足すると、野中官房長官の「番記者」を任されました。長引く金融不安と脆弱な政権基盤のため、小渕総理大臣は「冷めたビザ」と評されるほど不人気で、野中官房長官の記者会見は、自分の言葉で国民に語りかけることを模索していました。僕自身も、「番記者は裏で情報を取るのが仕事で、質問などしなくていい」とされてきた先例に疑問を感じ、会見室の最前列中央を定位置にして自分の質問でニュースを引き出そうと意気込んでいました。

もちろん、番記者が第一に求められていたのは、迅速かつ正確に政権中枢の情

報を入手することであり、結局は予定調和の世界じゃないかと指摘されれば否定ができませんが、ギリギリの線で情報をやり取りしていたという自負は今も持っています。その後、小泉総理大臣が、毎日テレビカメラに向けて自ら発言するスタイルを確立すると、官房長官会見のあり方も徐々に変化してきました。首相官邸が圧倒的な主導権を握る「安倍1強体制」の記者会見のスタイルが定着し、5年近くが経とうとしています。

菅官房長官の記者会見では、「何ら問題ない」「指摘は全く当たらない」と短く言い切り、有無を言わずに質問を遮る場面が目につきます。そうした威圧感に押され、会見に出席している記者の大半が対峙する術を失っているように見えます。加計学園の獣医学部新設問題で「総理のご意向」などと記された内部文書について、前川喜平前文部科学事務次官が「確実に存在していた」と証言しても、複数の現役職員が同様に証言しても、菅官房長官は、「文部科学省において検討した結果、出所や入手経路を明らかにされていない文書については、その存否や内容などの確認の調査を行う必要はないと判断した」と突っぱねていました。そうした中で、先週、東京新聞の望月記者が、前川氏の出会い系バー通いの情報や公益通報者保護制度の適用などを取り上げながら、第3者による文書の再調査を行うべきだと繰り返し見解を質しました。「私が答える立場にありません」「法律に基づいて適切に対応しています」「いま申し上げた通りで

す」と答弁されても、怯まず執拗に食い下がりました。進行役の官邸職員が「同じ趣旨の質問を繰り返し行うのは止めていただきたいと思います」と口を挟んでも、「きちんとした回答をいただけていると思わないので、繰り返し聞いています」と反論し、臆せず質問を続けました。官房長官に聞くのは筋が違ふと感じた質問もありましたし、もっと他に聞くべきことがあるだろうという批判も目にします。しかし、素っ気なく突き放されても、周囲から冷ややかに見られても、国民が知りたいことを聞き、いま質問すべきことをぶつける。望月記者の姿勢は、報道の原点を、議論の原点を、再認識させてくれました。

松本に帰ってから1年半が経ち、なぜ疑問に思っていることを指摘しないのだろう、表立って議論することが敬遠されるのはなぜだろう、とすることが多々あります。とりわけ議会とメディアを見ていて、そう感じます。これでは、市民が市政に関心を持つことにならないし、これまでの延長線上でやっていけばいいと考えるのも当然です。60年ぶりに建て替えの検討が始まった市役所新庁舎について、菅谷市長は、市民を二分する争いを避けることを理由に、現在地を建設場所とする方針を示し、ほとんど議論らしい議論が行われないまま決定されようとしています。未来の市役所はどうあるべきか、市役所の現在地を含めた松本城周辺をどう整備していくか。自由に質問をぶつけて閣議に議論することが、50年、100年先を見据えた街づくりに求められると考えます。

臥雲の会 事務局

〒390-0811

長野県松本市中央1丁目2-24

電話 0263-36-7343

Fax 0263-50-6727

E-mail info@gaun-y.com

編集後記

7月7日、今日は七夕。新生通信の発行日となりました。オフィシャルサイトのリニューアルに合わせて、今号よりデザインを刷新しました。基調色のダークトマトレッドは、情熱と行動力がみなぎり、達成を意味しています。願いが叶うとされるこの日、記念すべき通信を発行することができ、うれしく思います。良いことが続きますよう！（くり）

2017
7
vol.4

Lの視点で、Gの時代を穿つ

G 通信

臥雲義尚 × リポート

臥雲は日々何を考え、活動しているのか。
その横顔と頭の中を覗けるニュースレターです。

多事争論のある社会へ

「単一の説を守れば、

其説の性質は仮令ひ純情善良なるも、

之に由て決して自由の氣を生ず可からず。

自由の氣風は唯多事争論の間に在て存するものと知る可し」

（福沢諭吉『文明論之概略』）

政治記者を仕事にした理由の1つに、筑紫哲也という人の存在がありました。

僕が大学に入り直したのと同じ時期に、「朝日ジャーナル」の編集長となり、

『若者たちの神々』と称して、当時の若者が支持する人物を掘り下げる企画を連載。

ビートたけし、野田秀樹、村上龍、橋本治、山本耀司、桑田佳祐らと対談し、

すでに政治の季節が過ぎ去っていた時代の気分と若者の心情を代弁してくれました。

筑紫さんの本業は、自民党三木派などを担当した朝日新聞の記者で、

硬派でありながら軟派や異端視されるものを大切に、自在な姿勢に惹かれました。

その後、筑紫さんがニュースキャスターとなり、

自ら時事問題を論評するコーナーに付けた言葉が、「多事争論」です。

1つの意見がどんなに正しくても、

ほかの意見を最初から排除すれば、自由の氣風が失われる。

大勢の人々が様々な議論を戦わせることが、何よりも大切である。

福沢諭吉の書物を原典とする言葉は、民主主義の核心を突いていると思っていました。

それが最近、ともすれば「多事争論」を敬遠する空氣が広がっているように感じます。

注目された東京都議会議員選挙は、自民党の歴史的な大敗となりました。

安倍1強体制が自由な議論を封じめるかのような対応が続けたことが、背景にあります。

松本市では、議会で議論らしい議論も行われないまま、

市役所の新庁舎を松本城の隣の「現在地」に建設することを決定しようとしています。

市民を二分する対立が起きた歴史を繰り返してはならないというのが、その理由です。

若い世代の意見や異端視される見解にも耳を傾け、喧々譁々議論した上で結論を出す。

そうした社会を自分たちの手で取り戻していきたいと思います。

臥雲義尚

“ 若い才能は、社会に希望を与えてくれる。同時に、あの羽生でさえ革新される対象になるんだと、改めて諸行無常を感じる ”

「14歳 藤井四段、羽生三冠破る」

＼日々更新中／

臥雲の日常と横顔



Facebook



11月・12月おもな投稿記事

- 4/13 天守閣と桜の美しさを堪能
- 4/14 大相撲松本場所は満員御礼
- 4/16 50代野球大会で満塁本塁打
- 4/27 残雪の上高地 1年ぶり散策
- 4/29 入山辺の御柱祭に昭和回顧
- 5/ 1 浅間温泉活性の中学授業見学
- 5/ 7 深志強力打線で春季中信優勝
- 5/11 今井五介翁のルーツを辿る
- 5/17 松本養護学校で作業学習見学
- 5/19 有賀前市長お別れの会参列
- 6/ 1 旧保育園で串田演劇を鑑賞
- 6/ 3 中山そば振興会と南三陸町へ
- 6/ 5 市役所新庁舎で「現在地」提示
- 6/14 イオン渋滞に市の切迫感希薄
- 6/18 こいこい松本にスタッフ参加



松本城は、きょうから8日間、夜桜会と称して、本丸庭園も21時までライトアップされて無料開放される。今夜は冷え込みが厳しく、桜もまだ見頃とまでいかないが、若いカップルや外国人観光客の姿が目立つ。夜の間に屹立する天守閣の美しさを、大勢の人たちに堪能してもらいたい。



120人余りが在籍する高等部では、ダウン症や自閉症などの障害を抱えた生徒たちが、午前中、粘土班や木工班など5つの班に分かれ、将来の仕事の基礎を身につける作業学習を行っています。ヤスリで粘土の皿を磨く作業を見ると、きちんと段取りを付けてあげれば、1つの仕事を集中して丁寧に仕上げる力があるんだなあと感じました。支援よりも自立。学校を卒業した障害を持つ子どもたちが、「稼ぐ力」をつけるための仕組みをどう作っていくか。地域全体で取り組む課題だと思います。



松本市の住宅街にある廃園となった保育園を会場にした、串田和美さん主演の演劇「或いは、テネシーワルツ」を観てきました。演劇体験は、10数年前に渋谷のシアターコクーンで野田秀樹作品を観て以来。妄想、脱出、反転、といった言葉を思い浮かべながら、非日常の時間に浸ることができました。自転車で帰る道すがら、ちょっと贅沢した気分になってテネシーワルツのメロディーを鼻歌で奏でていました。松本でこそ味わえる愉しみかもしれません。



組織の基盤づくり 地区幹事会発足

5月28日、松本市時計博物館4階本町ホールにて、初めての地区幹事会を開催しました。市内24地区で地区幹事を選任し、当日は21人にご出席いただきました。臥雲義尚より、松本市政に取り組む決意と重点政策を表明し、地区幹事の皆様から、地域の課題や要望を頂戴しました。組織の基盤づくりにおいて最重要と位置づける地区幹事会を、多くの皆様のご協力により発足できましたことは、大きな励みとなりました。さらに今後、ご支援いただける方を探し、35地区全てに広げていきたいと思っています。



次代を
にう 若者×臥雲

**ジセダイと語る
松本のプライド**

ジセダイトーク

4/27

**若い世代で城のまちを創る
～三の丸倶楽部の試み～**



第9回のゲストは、温泉旅館明神館社長の齊藤忠政さんをお迎えしました。齊藤さんは、旧第一勧銀ビルを再生した丸の内ホテルを経営する縁で、「松本城・三の丸倶楽部」座長として、松本城周辺のまちづくりにも取り組んでいます。外堀の復元計画や新博物館建設、庁舎建て替えなどで、大きく変わろうとしているこの界限に、歴史を活かしながら、新たな息吹を吹き込もうとしています。

5/30

**Edition 4 時代に暮らす都市
～松本に移住した国際政治学者～**

第10回のゲストは、清泉女子大学准教授で国際政治学者の山本達也さんでした。エネルギーと国際政治をテーマに、国内外で研究生活を続けてきた山本さんは、アレッポ、ヘルシンキ、ネルソンで疑似居住体験を行い、6年前、たまたま立ち寄った松本に住むことを決意。ポスト・イージーオイル時代に求められる都市の潜在力を感じたそうです。



これから生き残る都市は、創造的なアイデアを生み出す都市。そのためのメルクマールは、寛容性の度合い&自然との距離感。松本は、この点のポテンシャルが高い。…ただ、あくまでポテンシャルであり、十分な水準に到達しているわけではない、と感じた人も少なくないはずです。これだけ幅広い知見と経験を持つ人物が松本を選んだことの意義を、しっかり受け止めたいと思いました。

＼ 臥雲義尚オフィシャルサイトが新しくなりました。／



「ジセダイをみつめて」というタイトルには、皆さんと一緒に未来を見つめ、次の世代に希望をつないでいこう、という想いを込めました。「Gの政治考」「ジセダイトーク」のアーカイブスとしてご覧いただけます。

<http://gaun-yoshinao.com/>